

(研修概要) 自分の思いや考えを進んで表現できる児童の育成 (2年次)
～極小規模校だからこそできる授業の工夫を通して～

阿武町立福賀小学校

1 はじめに

本校は、農業、林業、畜産業が盛んな山間部に位置していて、地域素材に恵まれた環境にある。本年度の全校児童数は9名で、第3学年が欠学年のため、低・高学年が複式学級、第4学年と特別支援学級が単学級の編成をとっている。日頃は、各学級で少人数による授業を行っているが、年間を通して全校道徳や福賀ふるさと夢太鼓等、全校児童で行う授業や活動もたくさんある。また、保護者や地域の協力が厚く、近年のコロナ禍においても、感染対策に十分に留意しながら、ふるさと学習や学習発表会、田植えから稲刈り、親子もちつき大会へと続く米作り体験等、特色ある教育活動を行った。

しかし、本校ならではの課題も少なくない。「話し合いが深まらない」、「新しいアイデアが生まれない」等は、極小規模校の児童に対して言われがちな話であるが、教員に対しても同様の感がある。少人数の上に行事が多いため、前年度のやり方を踏襲しがちで、それに囚われることが、内容の形骸化や教員の負担感につながっているように思える。この悪循環を打開するキーワードとして「極小規模校だからこそできる」を掲げ、研究に取り組むこととした。

2 研究主題

上記の研究主題は、本校児童が長年抱えている課題に対して設定したものである。その課題を教師サイドの新たな視点と行動力をもって解決するために、上記の副主題を設定した。極小規模校の利点や地域の特性、それらをアレンジする教員のアイデアを生かして、極小規模校においても新たな教育活動が創造されることをねらっている。

3 研究の内容

(1) 研究計画

本校だからこそできる授業を創造し、その確立に必要な視点や手立て等を見出すために、3年のスパンで取り組むこととした。1～3年次までのそれぞれの研究の目的と内容、年次ごとの系統性を以下に示す。

1年次 (令和3年度) 『地域素材の教材化を図る』

昨年度における地元の農業、林業、畜産業を教材としたふるさと学習の新たな取組や、今までの取組にアレンジを加えたものを以下に示す。

- ・ 地元へ飛来したアサギマダラの観察、地域おこし協力隊の方による草木染体験 等
- ・ 無角和牛とホルスタインを比較しながらの調査活動
- ・ スマート農業の見学と体験及び「福賀の農業のすごいところ」についての討論会
- ・ 間伐の見学と間伐材を使った発電についての講話及び発電のモデル実験
- ・ 四つ葉サークルによる紙芝居「宇生賀の七不思議」の上演と、その話に関連した場所を巡るウォークラリー

2年次 (令和4年度) 『全校合同授業における効果的な指導方法を見出す』

本年度は「全校〇〇」と称した全校合同授業を行い、そこで講じた工夫や手立て等の効果について検討し、異学年で授業を行う際の指導方法の確立をめざす。

3年次（令和5年度）『極小規模校だからこそできる授業の創造』

来年度は、これまでの研究の成果を基に、本校ならではの授業実践を積む。

(2) 本年度の研究の視点と評価方法

ア 研究の視点

視点1 全員参加できる取組の工夫

例えば、福賀ふるさと夢太鼓を見たとき、学年によって演奏の難易度は違うが、その演奏全体は調和のとれたものになっている。このように、一人ひとりの役割が保障されているかどうかを一つの視点とする。

視点2 全学年に学びや達成感等のある授業の工夫

一人ひとりの役割が保障されていても、そこに学びがあり、達成感が生まれる授業でなければならない。学年や発達段階に応じた学習内容があるかどうかを二つ目の視点とする。

イ 評価方法

授業者は、授業で講じる工夫や手立てを指導案上に示す。参観者は、その工夫や手立てが研究の視点1、視点2の効果を発揮しているかどうかを評価する。参観者は、本校教員だけでなく、萩阿武教育研究会へき地複式部会や阿武町3校協働研修会等を活用して幅広く募り、多様な視点から評価してもらうようにする。

4 具体的な取組

(1) 全校学級活動「メディアとのつき合い方のかんがえよう！」（6月27日実施）

授業者 校長 中野 達史

ア 授業の意図と主な活動

学校保健安全委員会で行われたもので、メディアの使い方について親子で考え、実生活で実践できる目標の設定をねらった。

導入 メディアの問題点について話を聞く。

展開 親子で話し合う。

終末 親子で決めたことを発表する。

イ 参観者からの評価（◇肯定的 ◆否定的）

「視点1 全員参加できる取組の工夫」について

◇「メディア」、「前頭葉」等の用語をイラストで示したり、メディアによる影響を「○○問題！」と見出しにしたりと低学年にも分かりやすい手立てや配慮が随所に見られた。

◇聞き手を引き付ける話術も巧みで、合間にクイズを入れるなどの工夫もあり、ほぼ一方的にプレゼンする形にもかかわらず時間を感じさせないものであった。

「視点2 全学年に学びや達成感等のある授業の工夫」について

◆児童の記述には、「やりすぎない」、「時間を決める」等、深まりが感じられなかった。「作戦を成功させるための具体的なめあてを考えよう」という問いは過去にも使われていて、形骸化した回答をするしかなかったのかもしれない。

◆全校で行いながら、異学年同士の関りがほとんどなかった。本時の主眼の具体的なイメージをもつ必要があった。

(2) 全校算数科「グラフを使って小麦を助け出せ！～データの活用～」（7月13日実施）

授業者 教頭 鎌田 潤一

ア 授業の意図と主な活動

みんながかわいがっている小麦（ウサギ）が、危険生物が出没する山奥に連れ去られたという設定で、それぞれの学年で扱う出没情報のグラフを読み解き、どのような時間帯と天候のとき助け出せばよいか見出させることをねらった。

導入 小麦が連れ去られたという場面設定を把握した後、与えられたデータやグラフをどのように扱えばよいか話し合う。

展開 各学年に分かれ、グラフを基に提示された問題に答える。

終末 グラフから読み取ったことを基に、小麦救出作戦について話し合う。

イ 参観者からの評価（◇肯定的 ◆否定的）

「視点1 全員参加できる取組の工夫」について

◇学年ごとに問題を設定することで、特に低学年児童は最後までやり遂げようとする姿が見られた。絵カードが84枚と、1年生にとって未習の多さだったが、9cm四方のカードを棒グラフ上に並べ、与えられた問題にグラフを基に答えていた。

◆4年生には、折れ線グラフの傾きから、各危険生物が昼行性か夜行性か、晴れと雨どちらがよく活動するかを見出させたかったが、個数の僅かな差にとらわれてしまい全体を俯瞰することが難しかった。

◆5・6年生の円グラフでも混乱が見られ、辛うじて各場面における危険生物の多少や、総数が異なる円グラフ同士は比較できないことに気付く程度だった。

「視点2 全学年に学びや達成感等のある授業の工夫」について

◇低年生は、「小麦ちゃんを助けるぞ!」と声を掛け合いながら張り切って絵カードを並べ、4・5・6年生は課題に対してよりも低学年に負けまいという気持ちが生まれ、全校で学習する意義が感じられた。

(3) 全校道徳「あいさつは、だれのため?」(9月14日実施)

授業者 教諭 藏永 京子

ア 授業の意図と主な活動

時と場に応じたあいさつの仕方や、あいさつがもたらす効果について話し合わせることで、実践意欲の向上をねらった。

導入 初めて会った人にどのようなあいさつができるか自己評価する。

展開 様々な場面を見て、どのようなあいさつをすればよいかグループで話し合う。

終末 よいあいさつをすれば、どのようなよいことがあるか話し合う。

イ 参観者からの評価（◇肯定的 ◆否定的）

「視点1 全員参加できる取組の工夫」について

◇導入では、低・中学年の自己評価に比べて、高学年の自己評価が低いことから、「何がいけないのだろう?」、「どう改善すればよいのか?」等、課題意識をもって学習に取り組むことができた。

◆全校道徳を3年間続けてきた成果がグループの話合いにおいても発揮された。ただ、成熟された授業であるからこそ、多様な意見を引き出す課題設定や、議論を深めさせる話合いのもち方等、一歩前進させる手立てが欲しかった。

「視点2 全学年に学びや達成感等のある授業の工夫」について

◆振り返りには意気込みが記述されていたが、それが型どおりの回答に見えて実践につながるだろうかと言う懸念の声も出された。児童が本当に実践できるか揺さぶりをかける工夫も欲しいところであった。

(4) 全校国語科「秋の言葉で気持ちを表そう」(11月9日実施)

授業者 教諭 三輪 美咲

ア 授業の意図と主な活動

集めた秋の言葉から自分の体験を想起させるものを選び、それを基にグループでエピソード・トークを行うことで、言葉に対する感性を豊かにすることをねらった。

導入 次時に学習発表会で掲示する俳句を作ると予告した後、秋からイメージする気持ちを発表する。

展開 学年ごとに与えられたテーマに沿って、秋の言葉を集める。

終末 集めた秋の言葉を使って、グループでエピソード・トークを行う。

イ 参観者からの評価 (◇肯定的 ◆否定的) ※萩阿武教育研究会へき地複式部会

「視点1 全員参加できる取組の工夫」について

◇秋の言葉を使ったエピソード・トークは、同じ言葉であっても一人ひとり体験が違い感じ方も違っていたので見応えがあった。

◆授業者自身の俳句(小学校の時の受賞作)を提示することで、児童が見通しをもつことができた反面、低学年が俳句を作るのは難しいのではないか。

「視点2 全学年に学びや達成感等のある授業の工夫」について

◇学年に応じたテーマの設定や、タブレットを活用した資料が用意されたので一人学びの活動が充実していた。

◇各学年で調べたことを縦割り班で共有できたので、言葉の広がりを感じさせることができたと思う。

5 成果と課題

ここまで計4回の全校合同授業を重ねてきたことで、授業のタイプが全学年同じテーマで同じ活動で進められるものと、全学年同じテーマであるものの活動は学年に応じたものに分かれることがわかった。それぞれのタイプについて考察してみる。

(1) 全学年同じテーマで同じ活動の授業(全校学級活動、全校道徳)

どちらの授業も身近な課題を扱ったため、共通の課題意識をもたせるのは比較的容易である。縦割り班の話合い活動も今までの経験の積み重ねがあるので、授業者のねらいどおりの授業を仕組みやすい。しかし、各学年または低・中・高学年にあった主眼の設定が不十分になりがちで、こうなると学習を深めさせるという点で弱さがある。

(2) 全学年同じテーマで活動は学年に応じた授業(全校算数科、全校国語科)

小麦(ウサギ)を助け出す、学習発表会に向けた俳句を作る等、児童の興味を引くテーマの設定に教師のアイデアが試される。主な活動は学年に応じたものになるため、主眼の設定は容易と思われるが、それを達成させるための問題設定にも授業者の力量が問われる。全校国語科のように各学年に課せられた問題が解決されると、終末の活動が充実したものにつながるので、今後の授業づくりのヒントにしたい。

6 おわりに

「極小規模校だからこそできる」を研究の軸として掲げることで、教員の授業づくりに対する意識も変わってきた。へき地複式教育と言えば、「わたり・ずらし」、「リーダー学習」等が取り上げられがちだが、新しい視点とそれに伴う新たな手法も取り入れる必要がある。新しい提案を本校から発信できるよう、今後も研鑽を積む所存である。